

子供が災害・事件に巻き込まれた時、3つのストレスが子供に襲いかかります。1つめは、死ぬのではとの恐怖によって起こるトラウマ・ストレス反応です。2つめは、災害では避難所生活や仮設住宅での不便な生活、事件ではメディアスクラムなどの生活ストレス反応です。3つめは、大切な人を突然亡くす、大切なものを失うという喪失ストレス反応です。それらのストレス反応は異常な事態での正常な反応です。大変なことを乗り越えようと心とからだがかんばっているのです。そして、保護者や教師が子供のストレス反応に適切にかかわることができれば、子供たちの多くがそれらのストレス反応を取めていく自己回復力をもっています。しかし、一部、それらのストレスにうまく対応できずにうつ・心身症・PTSD (PostTraumatic Stress Disorder; 心的外傷後ストレス障害)に移行することがあります。

災害や事件は人生のなかでも稀にしかありません。災害・事件のことを子どもが一切話したがない(会話回避)。物音に敏感になってイライラして、眠れていない(過覚醒)。一人でトイレに行けなくなった(退行)。津波ごっこ・事件ごっこ(再体験)。それらにどうかかわったらいいか、身近な大人にもわからないことが多いのです。

命を脅かされると、逃げるか戦うか、心拍を速めて、興奮水準をあげます(過覚醒)。危機が過ぎ去っても、興奮が冷めないでイライラしたり寝つかれなかったりします。呼吸法や体の力を抜く方法や自分なりの落ち着く方法が役立つでしょう。またトラウマは凍りついた記憶に喩えられます。凍りついて記憶の蓋があかないので思い出せない・感情がマヒして楽しいことが楽しいと思えない(マヒ)。しかし、トラウマ記憶に関連する安全なきっかけ刺激(“津波”という言葉や、事件のニュースなど)にふれると、氷が一瞬のうちに溶けて、トラウマ記憶の箱に吸い込まれるように入ってしまう、あの時のことがありありと思いだされて苦しい(再体験)のです。そうならないように、きっかけ刺激を避ける(回避)ことで、つらいことを思い出さないようにしているのです。しかし、きっかけ刺激を強く避け続けることは、回復を妨げます。それらの知識は、トラウマ

を乗り越える“心理教育”と呼ばれています。

そして回復のキーワードは、安全・安心、絆、そして表現、チャレンジです。強い余震が頻発する、そういう状況は安全ではありません。安全を確保するためには防災の知恵が必要です。しかし、避難訓練などの防災は、被災地ではトラウマの記憶を呼びさますきっかけ刺激になります。きっかけ刺激(“津波”という言葉など)自体は家を壊したり人を傷つけたりしないという知識を事前に子供たちに教えることが必要です。でも被災後、“津波”という言葉が大人が発することが子供たちを苦しめるのです。ですから、普通に、トラウマを乗り越える知識を学ぶ必要はありません。しかし、今の学習指導要領には、トラウマを学ぶページはありません。被災直後、予告なしの避難訓練は強い心身反応を惹き起こすことがあります。ところが、被災地での防災教育を、子供が主体的に段階的にチャレンジできるように「防災教育と心のケアをセットで行う」ことで、ストレス障害のリスクを減じ、成長を促すことができます。それらを人と人のよい絆の中でやりとげるとは、安心感を強めます。つぎが表現とチャレンジです。自分のペースを大切にしながら、日常生活の思いを表現し分かち合います。また津波であれば、避けている“浜辺”で楽しい活動をするなど、少しずつのチャレンジを重ねるなかで、つらかった体験を語り、綴り、描き、それを周りの人たちとしっかりと分かち合うことで、自分の人生の物語のなかに、思ったこと感じたこと、その体験の意味を組み込んでいくのです。それらは語り継ぐ防災教育の貴重な教材になります。



▲熊本地震後の小1クラスでの心のサポート授業の様子

学年 4年

## 『南三陸にさく「はるかのひまわり」』

### 本時の目標

- 変わり果てたふるさと、大好きな海を見ることができない主人公の思いについて考え、ひまわりの種に込められた思いと人々の思いやりが、主人公の深い心の傷を癒す力になることに気づく。
- つらいことを経験すると、その場所を避けたいことに気づき、友達からの応援により自分自身をリラックスさせ安心できることが、それを乗り越える力になることを体験的に実感する。

\*当初、道徳の内容項目「故郷を愛する態度」を目標としていたが、「大好きな海を見ることができない」ことがトラウマ反応の回避であり、この回避を児童たちも日々経験していることに気づかせ、児童がわが事として、この心の傷にどう向き合い、どう対処したらいいかを考える機会にしたいと思うようになり、心の傷を癒すということを、本時の目標にして展開した。

### 本時の位置づけ

地域教材『南三陸にさく「はるかのひまわり」』は、震災被害から立ち上がろうとする人々と、その心の支えとなったひまわりや人とのつながりについて書かれた教材文である。大好きな海を見ることができなくなった主人公の気持ちに寄り添うことによって災害が人々の心に大きな傷を残すことに気付くことができる。また、心の傷を和らげるための動作法も合わせて取り扱う。ペアで体を動かすことによってリラックスする方法を見つけることができる。前時で『あの日をわすれない はるかのひまわり』の読み聞かせを行った。阪神淡路大震災から新潟県中越地震、東日本大震災へとつながる「はるかのひまわり」の物語を知ることで災害を乗り越えてきた人々の想いや繋がりに気付けるようにしたい。また災害後の人々にかかるストレスの大きさにも触れ、ストレスを抱えた時にどうすればよいのか、友達と一緒に活動することで心の温かさに触れる機会としたい。

### 展開例

過程(時間)	活動内容	教師の支援・指導上の留意点
導入(5分)	●本時の内容を確かめる。	2学期は災害への備えや、災害直後の対応などを中心に学習してきたが今回は災害後の人々の気持ちを中心に学習することを伝える。
展開(35分)	地域教材(防災教育副読本「明日に生きる」)を授業者が読む。  【やわらかいまなざしのペア体験】 〈隣の人を「やわらかいまなざし」で見てください。今度は、隣の人を「こわいまなざし」で。はい、「やわらかいまなざし」で見てください。〉	教材文の流れを把握しにくい児童のために黒板に話の流れを整理する。  「大好きだった海」を見ることができなくなったことに注目するよう声をかける。 ひまわりの種を植えたことに注目するよう補助発問を行う。 牧野さんは海を見ることができなかったのが、どうなったのかと補助発問を行う。  「やわらかいまなざしでひまわり畑をみていた。その向こうに青い海がきらきらとかがやいていた」

過程(時間)	活動内容	教師の支援・指導上の留意点
<p>まとめ 5分</p>	<p>〈「つらかったことを思い出させるところには近づかない」アンケートしたよね。〉 牧野さんの大きな海を見ることができない、まさにこれだよ。</p> <p>小学4年のみんなのアンケートの結果はどうだったのか？</p> <p>42%の子はあるって。</p> <p>〈じゃあどうしたらいい？〉</p> <p>隣の子といっしょにからだを動かしてリラックスしてみよう！</p> <p>●本時のふり返りを書く。</p>	<p>〈なんで海を見ることができるようになったのか、班で話してみよう〉 牧野さんにとって「はるかのひまわり」が、人々との繋がりであり大変なことを乗り越えるための力になっていたことに注目するよう補助発問を行う。</p> <p>2学期に行ったアンケート結果に触れ、辛いことから逃げたい気持ちがあるのは当然のことであることを押さえる。一方でずっと逃げ続けると長い間辛い気持ちを抱え続けることになることにも触れる。</p> <p>災害でストレスを抱えた人々について触れ、リラックスする必要があることに気付けるようにしたい。</p> <p><b>【ペア動作法によるリラックス体験】</b> 2人組で行う。体験する人は両足を肩幅に開いて、両腕を前に伸ばして、右にゆっくりひねります。行けるところまで行きます。応援する人は、「ここまで行ったよって」。体験する人は前屈して、両腕をブランブラン、体の力をぬきます。そして、もう一度、両腕を伸ばして、右にゆっくりひねります。応援する人は、「すごい、ここまで行ったよ」とがんばったねってねぎらってあげます。</p>

**☑ 使用教材・準備物、留意事項など**

兵庫県教育委員会 防災教育副読本「明日に生きる」小4・5・6年用  
<https://www.hyogo-c.ed.jp/~somu-bo/bosai/shou-fuku.html>

岩手県教育委員会心とからだの健康観察より5項目の事前アンケート  
[http://www1.iwate-ed.jp/tantou/tokusi/h23\\_kokoro\\_s/r02/13-2\\_\(202007\).pdf](http://www1.iwate-ed.jp/tantou/tokusi/h23_kokoro_s/r02/13-2_(202007).pdf)

社会応援ネットワーク こころのサポート映像集 ゆるめることの不思議  
<http://shakai-ouen.com/dvd/dvdb03.html>



テーマ	VR、AR を活用した災害疑似体験
教科等	総合的な学習の時間 事前の講義+疑似体験または疑似体験+講義・振り返り（2 コマ）
本時の目標	VR、AR を活用し、災害を疑似体験することにより、適切に避難行動をとることができるようにする。

VR や AR は、子供たちにとってゲームなどで慣れ親しんだ技術です。VR や AR を活用した災害疑似体験を通じて、子供たちは災害時の状況をイメージし、どのように行動をとったらいいかを理解できるようになります。

▶ 危機感が迫るVR映像を見て、適切な避難行動を考える



**KeyWord**  
**VR (Virtual Reality、バーチャルリアリティ)**  
 自分が実写映像またはCGで作られた人工現実の世界にいる感覚を体験できる技術。実際に災害現場にいるような臨場感を体験することができます。

**KeyWord**  
**AR (Augmented Reality、拡張現実)**  
 実際の風景に浸水や火災で煙が充満しているCG画像を加えることにより、自分がいる場所で災害が起こっている状況を体験できます。

2階まで浸水している様子の映像、火災など、危機感にあふれた映像をヘッドセットを装着して視聴

します。水害や火災など、わが身に危険が及ぶ様子を実体験します。

▶ ARで水害、煙害をシミュレーション

災害疑似体験アプリを使って、水害、火災による煙害を体験します。

スマートフォンに紙製の簡易ゴーグルを装着し、ゴムバンドで頭に固定すると、実際の風景にCGでリアルに表現された煙や浸水の状況を重ねて見ることができます。

児童は、煙が充満してくると、視界が悪く



▲煙に巻かれないように避難をする訓練



浸水体験は、水面が波立ったり、水が茶色に濁ったり、漂流物が流れ出したりして、臨場感にあふれています。児童は、津波や洪水の怖さと避難の必要性を実感できます。



▲タブレットを使えば、ヘッドセットをつけずに体験できます。



● 児童生徒の感想 ●

- ・私はVR、ARの授業を通して津波や火災が起きた時の対処法がよくわかりました。この貴重な体験を地域の人や家族の人たちに広めていきたいです。
- ・実際に学校で起きている想定でやったのでとっても身近に感じることが出来ました。これからこれまで以上に訓練に参加してどうやって逃げるか等見直しをしていきたいと思いました。
- ・この体験を通して、もし災害が起こったらすぐに対処できるようにしたいです。
- ・水の流れを変えてみて、漂流物が迫ってくるところが、恐ろしく感じました(高校生)。

Point

指導上の注意ポイント

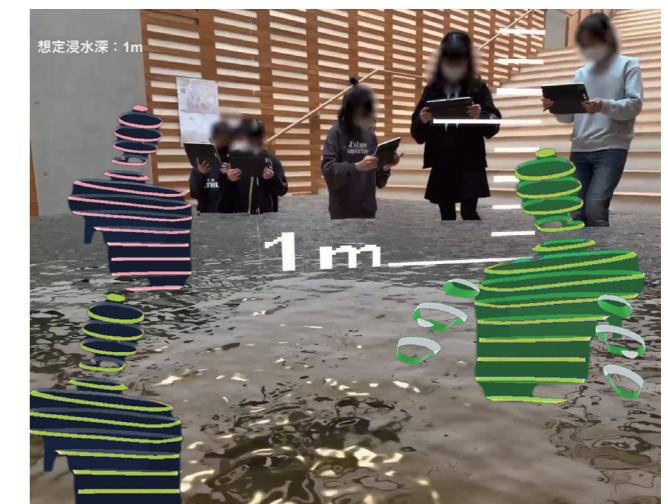
- ・長時間ヘッドセットをつけてVR映像やAR画像を視聴すると、目に負担をかけ、人によっては酔いを起こすことがあるため、長時間視聴させないように注意します。
- ・単に「おもしろい」「楽しい」体験で終わらずに、授業の前後に基礎知識を定着させると効果的です。

今後、VRやARの体験は、コミュニティスクールやPTAの活動と連動し、保護者や地域住民も参加して、地域の特性に沿った防災対策を考えるきっかけになっています。

VRやARの体験に積極的に取り組んでいる自治体は、地域の大学などと連携し、より効果的な防災教育プログラムの策定を進めようとしています。

▶ 未来は、メタバースで避難訓練

コロナ禍では密になる避難訓練を実施できなくなりました。しかし、メタバース(インターネット経由で複数人が共有できる人工現実空間)であれば、遠隔地の人同士が自宅にいながらにして同じ疑似体験ができ、自分の分身であるアバターが仲間と協力し合って、危険を回避する訓練ができます。防災教育のカタチも変化してきています。



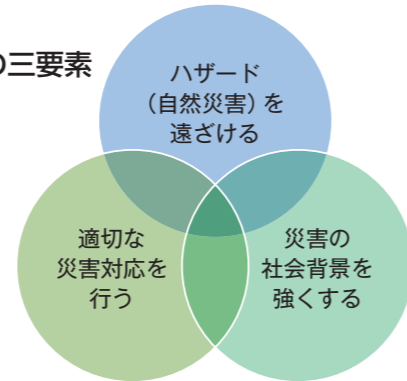


## Topics 防災をテーマにした特別支援学校との交流

2002年、兵庫県立舞子高等学校は、阪神・淡路大震災の教訓を引き継ぐため、「環境防災科」を設立しました。目的は、自助・共助の大切さを知り、自分たちの命は自分たちで守る行動をとることです。「環境防災科」では、防災を3つの観点でとらえています。

- ①ハザード（自然災害）の仕組みを理解し、危険を遠ざける。
- ②適切な災害対応ができるようになる。
- ③社会背景（災害に対する脆弱性を減らす）を強くする。

### 防災の三要素



2011年、東日本大震災をきっかけにして、舞子高等学校は、地域の特別支援学校（兵庫県立視覚特別支援学校(高等部)、兵庫県立芦屋特別支援学校(高

等部)、こばと聴覚特別支援学校(幼稚部)、神戸聴覚特別支援学校(高等部)との交流を始め、防災共同学習を行ってきました。

### ▶多彩な防災共同学習

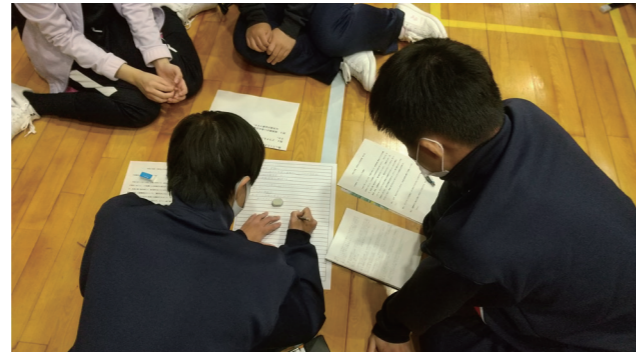
防災共同学習の特徴は、生徒が主体的に学習内容を企画する、障害の特性に応じて学習内容を検討することです。まず、特別支援学校の教員から障害の特性や合理的配慮に関するレクチャーを受けた後、生徒が交流内容を考えます。



▲ゴールボールを体験



たとえば、兵庫県立視覚特別支援学校との防災共同学習では、初回に点字やガイドヘルプ講習を受講し、次に障害者スポーツの体験や、防災をテーマとしたワークショップを行っています。



▲「帰宅困難者になったらどうするか」をテーマにグループディスカッション

### ▶いざというときにすぐに役立つ避難訓練

こばと聴覚特別支援学校との防災共同学習では、手話や劇を通して地震・津波について学ぶとともに、避難行動の練習を行いました。



▲校内の備蓄非常用品を確認

芦屋特別支援学校との防災共同学習では、南海トラフ地震の想定被害を学んだうえで、非常持ち出し袋の中身や、どのような避難行動をとればよいかを確認しました。



▲地震が発生したときの避難の姿勢を体験



### ●生徒の感想●

- ・視覚特別支援学校の生徒さんが点字を使って普通の高校生と変わらない授業をしていることを知れました。点字の仕組みはすごく複雑でした。基本的なことは分かったけれど、50音となると覚える量が多く、点字を使って学習することは本当に大変だと感じさせられました。
- ・障害がある人々が安心して暮らすために、点字ブロックなどのさまざまなバリアフリーについ

ての重要性を僕たちがまず知って、自分たちに何ができるかこれから探していきたいです。  
 ・先入観にとらわれて、健常者が視覚障害の方々の限界を決めているのではないかと感じました。……私たち晴眼者が視覚障害の方の限界を決めてしまうのではなく、視覚障害の方にとって出来ることがさらに増えるように手助けしていく必要があると思います。

### ▶特別支援学校にとっても貴重な学びの機会

一方、兵庫県立視覚特別支援学校は、平成17年から舞子高等学校との交流を始めました。以下のように交流の目的を掲げています。

- ・生徒のコミュニケーション能力の向上を図る。
- ・同じ世代の普通高校の生徒との交流する機会を増やしたい。
- ・障害種でもマイナーな視覚障害について理解してもらいたい。

舞子高等学校との交流を積み重ねた結果、成果が徐々に表れてきています。たとえば、

- ・生徒が次第に意見を言えるようになってきた。
  - ・舞子高等学校環境防災科の生徒から、視覚障害者としての立場からの意見を聞かせてほしいという熱心な働きかけのおかげで話しやすくなった。
- 防災という共通の目標を持ち、交流や共同学習することによって、相互理解(心のバリアフリー)が深まっています。

## セーフティプロモーションスクール

セーフティプロモーションスクール（以下、SPS）とは、大阪教育大学附属池田小学校事件の教訓をもとに、大阪教育大学を中心に普及が推進されている取組である。

教育振興基本計画における自助・共助・公助の理

念のもとに、教職員、児童・生徒、PTA 地域が参加する共感と協働に基づく安全教育・安全管理・安全連携を推進する包括的な「学校安全」の取組で、セーフティプロモーションスクールの趣旨に賛同いただいた学校と協働しながら推進されている。

SPSの理念となる「7つの指標」(下表)に基づいて、学校独自の学校安全（生活安全・災害安全・交通安全）の推進を目的とした中期目標・中期計画を明確に設定

その目標と計画を達成するための組織の整備とS-PDCASサイクルに基づく実践と協働

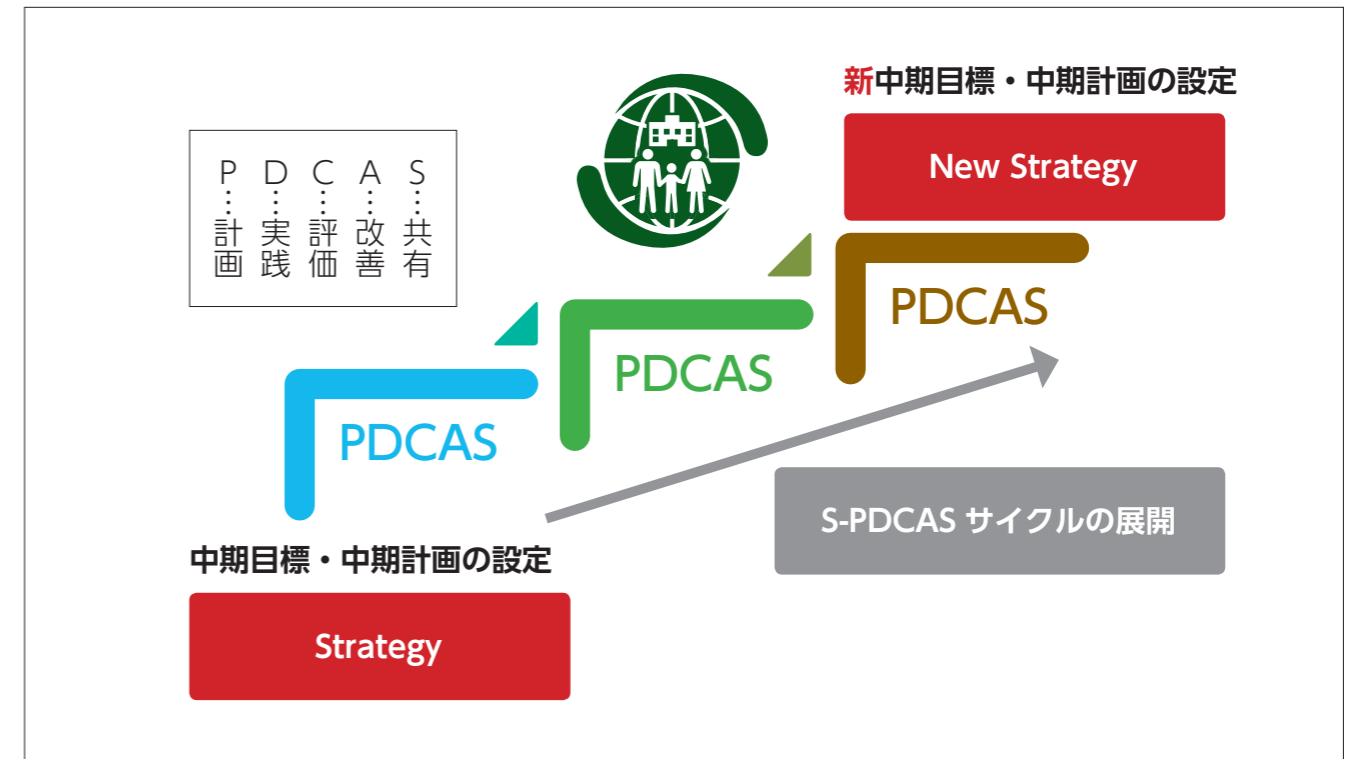
分析による客観的な根拠に基づいた評価の共有が継続されていると認定された学校を「セーフティプロモーションスクール」として認証

日本セーフティプロモーションスクール協議会と協定書を締結し、安全に対する分析と評価を基盤とする未来志向に基づいた安全推進の取組を協働的に展開

### セーフティプロモーションスクールの7つの指標

指標 1 (組織)	学校内に「学校安全コーディネーター」等を中心とする学校安全推進のための「学校安全委員会」が設置されている。
指標 2 (方略)	学校において、「生活安全」・「災害安全」・「交通安全」の分野ごとに、セーフティプロモーションの考え方に基づいた「中期目標・中期計画（3年間程度）」が設定されている。
指標 3 (計画)	学校安全委員会において、「中期目標・中期計画」に基づいた学校独自の学校安全推進のための「年間計画」が、「安全教育」・「安全管理」・「安全連携」の領域ごとに具体的に策定されている。
指標 4 (実践)	「年間計画」に基づいて、学校安全委員会を中心に、学校関係者が参加して、学校安全推進のための活動が年間を通じて継続的に実践されている。
指標 5 (評価)	学校安全委員会において、実践された学校安全推進に関わる活動の成果が定期的に報告され、それぞれ分析に基づく明確な根拠をもとに学校安全推進活動に対する評価が行われている。
指標 6 (改善)	学校安全委員会における次年度の「年間計画」の策定にあたって、それまでの活動成果の分析と評価を参考に、当該校における学校安全に関わる実践課題の明確化と「年間計画」の改善が取り組まれている。
指標 7 (共有)	学校安全推進に関わる活動の成果が、当該の学校関係者や地域関係者に広報・共有されるとともに、「協働」の理念に基づいて、国内外の学校への積極的な活動成果の発信・共有と新たな情報の収集が継続的に実践されている。

### セーフティプロモーションスクール活動の展開



詳細は以下で確認できる (参考 URL)

大阪教育大学 学校安全推進センター <http://ncssp.osaka-kyoiku.ac.jp/sps>



## 地域との協働による安全・安心な学校づくり、そしてSDGsの取組へ

東京都豊島区は、内閣府の「SDGs 未来都市」「自治体 SDGs モデル事業」に選定され、「住み続けられるまちづくり」を進めています。

2012年豊島区は、世界保健機関（WHO）が推奨する安全・安心なまちづくりの国際認証「セーフコミュニティ」を取得しました。同時に、安全・安心な学校づくりをめざし、区立朋有小学校が国際ナショナルセーフスクール（ISS）認証を取得しました。2021年度、豊島区内の全8中学校ブロックで1

校以上の認証取得校が誕生しました。今後はISS活動のノウハウを生かした「安全・安心な学校づくり」を全校で展開していきます。

また、「SDGs 達成の担い手育成事業」も2021年度から開始し、全小中学校で保護者・地域との協働によるSDGsの取組を実施しています。

このように豊島区では、ISS活動や「SDGs 達成の担い手育成事業」など、学校と保護者・地域との協働による活動を推進しています。

### ▶ 自ら考え、主体的に行動する

豊島区が進めている安全・安心教育の第一の特徴は、児童生徒が気づき、主体的に考え、行動していることです。

児童生徒が中心となってISS委員会を組織し、学校の安全・安心についての課題を考えます。

豊島区立池袋第一小学校では、児童ISS委員が中休みや昼休みの時間に校内をパトロールし、走ってけがにつながっていないかを調査しています。校内パトロールの結果、「ヒヤッとポイントマップ」にシールを貼り、発表しています。

6年生が全体のリーダーとなり、1年生と6年

生、2年生と4年生、3年生と5年生が一つのチームになり、問題を解決するためにどうしたらいいかを話し合い、異学年が学び合っています。

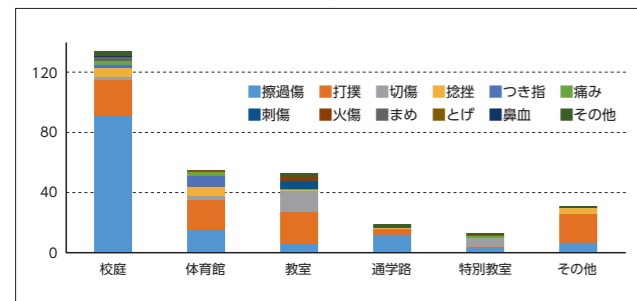
### KeyWord

#### インターナショナルセーフスクール (ISS)

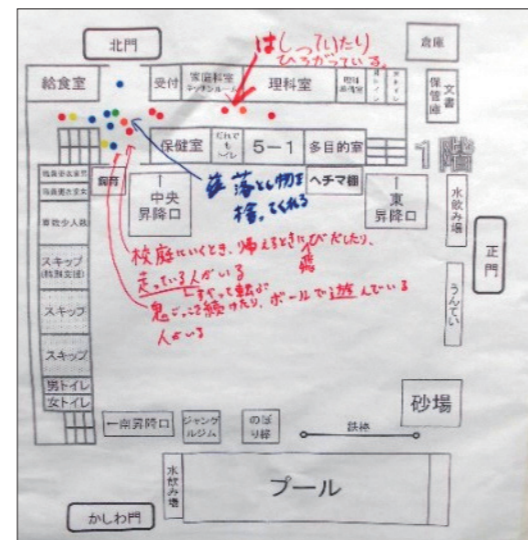
ISSは、より安全な教育環境づくりに取り組む学校に与えられる国際認証です。

「体と心の」けが及びその原因となる事故、いじめ、暴力を予防することによって、安全で健やかな学校づくりを進める活動です。

けがの種類別にどの場所ですごったかを統計をとる。



「場所別けがの種類」(2020年度 豊島区立池袋第一小学校インターナショナルセーフスクール申請書)



▲「ヒヤッとポイントマップ」を掲示

### ▶ データを見える化し、対策につなげる

第二の特徴は、学校の安全・安心に関わる課題について、データを集計・分析し、対策を講じていることです。データを見える化することにより、気づきが生まれます。たとえば、学校内を走っている児童が多いという問題を考える場合、どこでけがをしているかを集計し、対策につなげます。



▲児童が考えた寸劇でマスク着用を促す



▲コスチュームを身にまとい寸劇

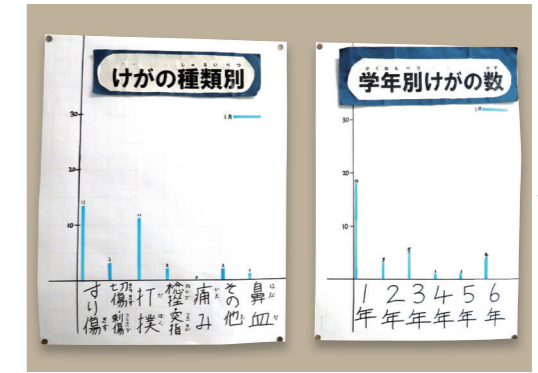
高学年の児童は、「低学年が理解してくれてうれしい。やる気が出てくる。」と、手ごたえを感じている様子です。先生も、「あれをしなさい、これを

### ▶ 地域コミュニティとのつながり

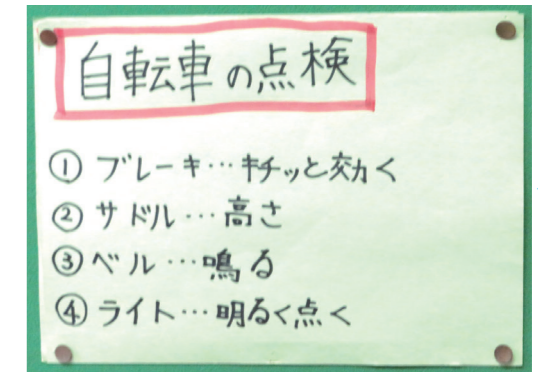
第三の特徴は、町会や青少年育成委員、民生・児童委員、警察署、消防署・消防団などの地域の組織や保護者と連携していることです。豊島区には、長く住み続けている住民と新たに流入してきた子育て世代の交流が芽生え、地域コミュニティが根づいていて、保護者・地域住民が通学路の見回り活動を行っています。

学校と地域との協働組織である「ISS 地域対策委員会」では、学校や地域の取組、校内のけがのデータなどを報告し、効果的なPDCAサイクルの構築

また、新型コロナウイルス流行下においてマスクの着用率について統計をとり、低学年のマスク着用率が低いことがわかると、高学年の児童がマスク着用の大切さについての寸劇を映像にとり、低学年にマスクの効用をわかりやすく教えるなど、アイデアを出し合って活動しています。



けがの種類、学年別けがの数を集計・グラフ化し、掲示する。



自転車で乗るときの注意点を掲示する。

しなさい。」と指示するのではなく、活動をサポートし、児童の成長を温かく見守っています。

を目指しています。

今後はISS活動など、これまで培ってきた協働による取組を生かした、豊島区コミュニティ・スクールを推進し、各校に拡大していきます。





## Topics Phase Free (フェーズフリー)

### KeyWord

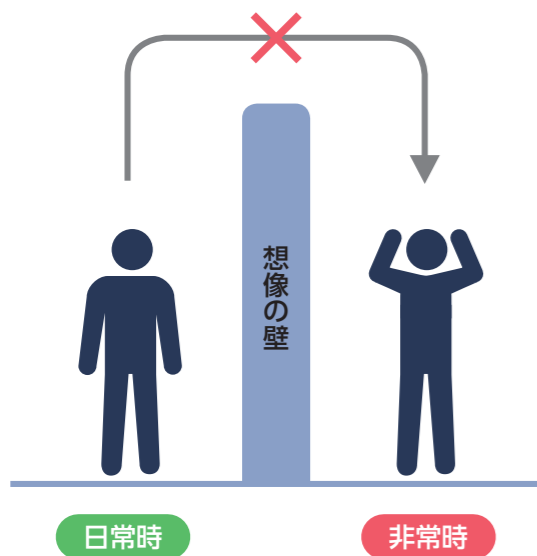
#### フェーズフリーとは

「日常時 (いつも)」と「非常時 (もしも)」という2つのフェーズ (社会の状況) に関係なく、生活の質を確保しようという考え方です。

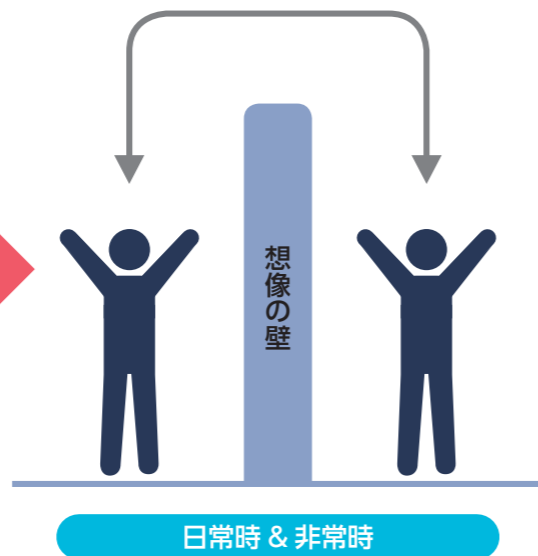
災害などの「非常時」を想像できないと、いざ災害が起こったときに適切な行動をとることができません。そのた

め、日常の取組を非常時にも役立つために、日頃の授業の中にフェーズフリーの考え方をとり入れます。毎日の知識や経験の積み重ねが身を守ることにつながり、子供たちの「生きる力」を高めます。

非常時をイメージできないから  
いざという時守れない



非常時をイメージできなくても  
フェーズフリーで守られる



#### 災害対応力向上の視点

- フェーズフリーは、「日常」の学校生活にも役立つものであるため、続けることができます。
- 日々の学校生活の中で、子供たちの防災についての意識を高めたり、役立つスキルを身につけたりすることができます。
- 余分な授業時数を必要としません。
- 生活全般にわたる、非常時に役立つスキルの習得へとつなげることができます。

(出典：令和2年度文部科学省委託「学校安全総合支援事業」『PHASE FREE CONCEPT & GUIDEBOOK for school』鳴門市教育委員会)

### 算数の授業の事例

**Q** 津波は陸上に上陸したときに、時速36kmで進むといわれています。津波が追いかけてきたら、50mを何秒の速さで逃げる必要がありますか。

**A** 時速36km ⇒ 1分600m ⇒ 1秒10mの速さで津波が追いかけてきます。つまり、50mを5秒以内のスピードで走らないと、津波から逃げるできません。

小学5年生の50m走の  
平均タイムは約9秒

**津波のスピードはとても速い!**

津波のスピードは子供が全力で走るよりも速いので、早く避難しなければならないことを知る。

### 日常の感染予防

体育 (保健)

- 正しい手洗いの方法やマスク着用の意義などの基本的な感染予防の方法を知り、主体的に実践することで、感染症や病気から自分の身を守ろうという意欲をもつ。
- 避難所等での生活の際にも、感染予防をしようとする意識をもつことにつながる。



### 新聞を読もう

社会 「情報を伝える人々」等

- 数紙の新聞を比べて、同じ出来事であっても用いる写真や言葉等の表現によって、受ける印象の違いがあることに気づく。
- 新聞を比べながら、情報の大切さとともに自然災害の怖さ、備えの大切さなどに気づく。



### 大地のつくり

社会 (地理分野) 等

- 地震発生のメカニズムや、活断層、液状化現象等について知る。
- 自分たちが住んでいる地域について調べ、起こりうる自然災害について考える。



### まちが大すき たんけんたい

社会 (まち探検)

- 学校周辺を探検し、自分の町やお店、公共施設などに興味をもつ。
- まち探検で出会った人と、登下校などで挨拶したり、話をしたりする。
- 防災対策 (堤防、防火倉庫、避難施設等) を見つけ、それぞれの役割を知る。
- 学校やいろいろな場所での発災時に必要な行動について理解し、実践しようとする。
- 探検ルートに避難場所までの経路等を重ね、避難訓練を兼ねる。



## Topics 熱中症予防をテーマにポスターセッション

### 本時の目標

- 熱中症などの発生の際には基本的な手順や方法があることを理解できるようにする。

### 本時の位置付け

- 特別活動（学校行事）と教科「保健」と関連して行う。
- 特別活動（学校行事）で熱中症予防の講話を行う。
- 事前指導として教科「保健」にて、レポート課題（「熱中症」について）を行ったうえで、講話を受ける。

#### 【レポート課題テーマ】

- 「熱中症」のしくみ・事例
  - 「熱中症」の予防法
  - 「熱中症」の対処法
- 事後指導として、生徒会が中心となり各クラブ活動で日常的な応急手当と心肺蘇生法及び熱中症予防の講習会を行う。
  - 指導時期としては、事前指導を5月頃～6月。本事例を6月半ば以降。事後指導を夏期休業前とする。

### ▶ 本時の展開例

過程	学習活動	教師の支援・指導上の留意点
導入	◆発表資料作成の説明を聞く。	<ul style="list-style-type: none"> <li>事前にグループ分け（4～6名）を行う。</li> <li>同じ課題テーマ者同士でグループを作る事に留意する。</li> <li>課題テーマ①「熱中症」のしくみ・事例 ②「熱中症」の予防法 ③「熱中症」の対処法</li> <li>事前課題を使用し、ポスター作成を行うことを説明する。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆発表の評価の説明を聞く。</li> <li>◆発表後のまとめについての説明を聞く。</li> <li>◆事前課題レポートを確認しグループ内でレポートを発表しあう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆発表の評価表を説明し、グループの評価を行う。</li> <li>◆発表後他グループのポイントをグループ内でまとめることを伝え準備させる。</li> <li>◆発表者、書記、グループワークの司会者等の役割を決めるようにする。</li> <li>◆自分のレポート、グループのレポートを確認するようにする。</li> </ul>

過程	学習活動	教師の支援・指導上の留意点
展開	◆発表資料の作成を行う。 グループ内でポスター1枚にその内容をまとめ、全体に伝える準備をする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○巡回指導を行う。</li> <li>○発表準備に行き詰まるグループがあれば指導を行う。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆グループごとに発表を行う。 ポスターセッションを行う。</li> <li>◆各グループの発表を聞き、評価を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○発表順については、テーマ①・②・③の順番で行う。</li> <li>○発表の時間を設定する。</li> <li>○発表について補足説明・助言等を行い、理解を深めるようにする。</li> <li>○司会を中心にグループで簡潔にまとめを行うようにする。</li> <li>○巡回指導を行う。</li> </ul>
	◆発表のまとめ 司会を中心に各グループの発表ポイントをまとめ個人のノートにまとめていく。	
整理	◆「熱中症」だけではなく日常的な応急手当についての知識を教材から学習する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「生活安全」を確保するために日常的な応急手当についても教材等を使用し紹介を行う。</li> </ul>

### ▶ 本時における評価の視点

- 各自、事前レポート作成が出来ているか。講演会、理解度アンケート。
- グループでの発表・ポスター作成の評価。
- ポスターセッション、お互いで評価。
- 事後指導、応急処置講習会の参加状況。

### ☑ 使用教材・準備物、留意事項など

- 教科書、ノート